

チベットにおける宗義文献(学説綱要書)の問題

御 牧 克 己

一、はじめに

もう一世紀以上も前にロシアの碩学ワシリエフ Was-siljew W. が行なったインド仏教哲学諸派の思想の明瞭な叙述は我々に深い印象を与えた。そしてその際我々は彼が根拠としていたチベット人による宗義文献(学説綱要書 grub mtha)なるものの重要性を実感したのである。尤も、ワシリエフが依っていた宗義文献はジャムヤンシホフ、Jam dbyangs bzhad pa (1648—1722) の『大宗義書』 Grub mtha' chen mo 一本のみであった。以来^{おびただ}夥しい数の宗義文献が入手可能となるにつれ、チベ

ット人達がインド諸論師の思想的立場を明らかにすること如何に寄与したかをますます認識することになったのである。この寄与は中観学派の内部分類について特に著しい。自立論証派 (Svatantrika)、帰謬論証派 (Prasāngika)、経量中観派 (Sautrāntika-mādhyamika)、瑜伽行中観派 (Yogācāra-mādhyamika) といった中観学派の内部分派を示す重要な用語が実はチベット人達によって造り出されたものであり、インド論書中にはそのままの形では見出せないことは現在では周知の事実である。しかし、このことはこれらの用語の価値を減じることでは決してなく、その限界さえ正しく認知して用いるならば諸論師

の思想的傾向を速かに的確に把握することが出来る点で
大変有益な分類であると言わねばならない。

しかしながら、一方、チベット人達はこれらの用語を
画一的に用いているわけではなく、実に多様な用い方を
している。そこにはチベット人達がインド諸論師の思想
を如何に苦勞して理解し分析しようとしていたかがあり
ありと窺うことが出来る。これらの諸学派の名称がイン
ド原典中に見出されるかどうか、これらの名称付けが実
際にインドの思想家達の思想と逸脱していないかどうか
等の吟味考察はむしろインド仏教の領域に属する問題で
ある。しかし、チベット人達がこれらの名称をどうい
う意味内容で用いているか、その発展をチベット人の諸著
作中に跡づける作業はチベット仏教の問題に他ならな
い。要するに、チベット仏教とは、その一面に於て、チ
ベット人達がインド仏教を受け継ぎそれを消化すること
によって自分達自身の仏教を生み出した過程であると定
義してよいであろう。このチベット仏教の側面は宗義文
献中に最も直接的に見ることが出来る。本稿が、チベッ
ト仏教の特集中に、トツカン三世ロブサンチョキニマ

Thu'u bkwan Blo bzang Chos kyi nyi ma (一十三十
一—一八〇二)の『宗義の水晶鏡』*Grub mtha' shel gyi
me long* に代表されるチベット仏教諸派の思想を叙述し
た宗義文献ではなく、インド仏教諸派の思想を述べる宗
義文献の方を対象とするのはそのためである。従つて本
稿中宗義文献と言へば必ず後者を指す。

二、現存する宗義文献の全貌

現在夥しい数の宗義文献が入手可能であると上に言っ
た。どれくらい文献があるか夫々の著者の属する学派
毎に表の形で示してみよう。純粹の宗義文献ばかりでな
く、類似文献や、本稿に関係する学派の分類を多少とも
述べる文献もこの機に加えておく。

一、古著者並にニンマ派 (rNying ma pa)

- 1、敦煌チベット文書。スタイン本二六〇、六〇七、
六六六、六九二、六九三、六九四、ペリオ本一
六、一一一、八一二、八一四、八一五、八一七、八
一九、八二〇、八三七、八四二、二二〇一。

2、Ye shes sde, *lTa ba'i bhyad par*.

問題(著者経典)の宗義文献におけるチベット

3. dPal brtsegs, *lTa ba'i rin pa bshad pa*.
4. Nyi ma 'od, *lTa ba'i rin pa*.
5. Rong zom Chos kyi bzang po, *lTa ba'i brjed
byang*.
6. " ", *Grub mtha'i brjed byang*.
7. " ", *Man ngag la ba'i phreng ba zhes
bya ba'i 'gel pa*.
8. Klong chen rab 'byams pa, *Grub mtha'
mdzod*.
9. " ", *Yid bzhi mdzod (+Rang 'grel)*.
10. 'Ju Mi pham rgya mtsho, *Yid bzhi mdzod
kji grub mtha' bsdas pa*.
11. bDud 'joms rin po che, *rNying bstan rnam
gzhiag*.
12. Grags pa rgyal mtshan, *rGyud kji mngon
par rtogs pa rin po che'i ljon shing*.
13. Sa skya Pandita Kun dga' rgyal mtshan,
gZhung lugs legs par bshad pa.
14. sTag tshang Lo tsa ba Shes rab' rin chen,
sTag tshang grub mtha'.
15. Pañ chen Shā kya mchog ldan, *dBu ma rnam
par nges pa'i bang mdzod lung dang rigs pa'i
rgya mtsho*.
16. " ", *dBu mai byung tshul rnam par
bshad pa'i gtan yid bzhi lhum po*.
17. Go rams pa bSod nams seng ge, *rGyal ba
thams cad kyi thugs kji dgongs pa zāb mo dbu
mai de kho na nyid spyi'i ngag gis ston pa nges
don rab gsal*.
18. dBu pa blo gsal, *Blo gsal grub mtha'*.
19. Tsong kha pa, *Lam rin chen mo*.
20. " ", *Drang nges legs bshad srying po*.
21. Se ra rJe btsun pa Chos kyi rgyal mtshan,
Grub mtha' rnam gzhiag.
22. Dalai II dGe 'dun rgya mtsho, *Grub mtha'*

31. *dGe bshes Ngag dbang nyi ma, Nang pa'i grub mtha' smra ba bzh'i 'dad tshul gsal bar bshad pa blo gsar rig pa'i sgo 'byed.*
32. Bu ston Rin chen grub, *Bu ston chos 'byung.*
33. 'Ba' ra ba rGyal mtshan dpal bzang, *Grub mtha' rnam bzhag (+dka' 'grel).*
34. Bo dong Pañ chen Phyogs las rnam rgyal, *Encyclopedia Tibetica, vol. 11 (dzia).*
35. Vairocana = Ba gor Rin chen blo gsal, *Theg pa rin pa mngon du bshad pa'i mdo rgyud.*
36. Tre ston rGyal mtshan dpal, *Bon sgo gsal byed.*
37. dPal btsun Nam mkha' bzang po, *Theg pa rin pa gsal ba'i sgyon ma.*
38. Shar rdza bKra shis rgyal mtshan, *Theg dge'i grub mtha' rnam gzhag nyung 'das.*
39. " ", *Lung rigs mdzod.*
23. Pañ chen bSod nams grags pa, *Grub mtha' rnam gzhag.*
24. 'Jam dbyangs bzhad pa, *Grub mtha' chen mo.*
25. Sum pa mkhan po Ye shes dpal 'byor, *Grub mtha' rnam bzhag nyung 'das.*
26. lCang skya II Rol pa'i rdo rje, *lCang skya grub mtha'.*
27. " ", *Dag jig mkhas pa'i 'byung gnas, chap. 5: Grub mtha'i skor.*
28. bSkal bzang lha dbang, *Grub mtha' rnam bzhag dge legs 'byung gnas.*
29. dKon mchog 'jigs med dbang po, *Grub mtha' rin chen phreng ba.*
30. Thü'u bkwan III Blo bzang Chos kyi nyi ma, *Grub mtha' shel gyi me long, chap. 1: 'Phags yul du phyi rol pa dang rang sde'i grub mtha' byung tshul.*

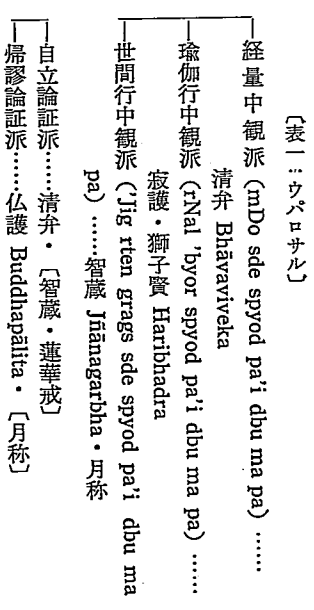
40. dPal ldan tshul khtrims, *g'Yung drung bon gyi bstan 'byung, vol. I pp. 428—89: Phy'i mtshan rgyid kyi grub mtha' Bye mDo dBu Sens bahi 'am rnam rang sens dpa' gnyis tshul.*

三、宗義文献の問題点

——中観派の内部分類——

先に宗義文献が中観派の内部分類について特に著しい興味を示すことを言った。筆者がここ数年間取り組んできた一四世紀のカダム派のウパロサルの宗義書中に見られる中観派分類を手掛かりとして、諸宗義文献中に於ける同派の分類の変遷と発展を跡づけてみたい。

後代のゲルク派の宗義書が月称 Candrakīrti の思想を重視するのに比し、このウパロサルの宗義書は寂護 Śāntarakṣita と蓮華戒 Kamalāsīla の思想を強調する点の特徴とするが、その中に見られる中観派の分類を表にするならば次の如くである。



表中鉤括弧は人名が直接明記されている訳ではないが引用経典より判断出来ることを示す。この分類について少くとも次の三点を注記しておくべきであろう。

一、中観派の分類に、一方では、経量中観派、瑜伽行中観派、世間行中観派という分類と、他方では、自立論証派、帰謬論証派という分類の二つの分類が示されており、この両者は厳密に区別されていて後代のゲルク派の宗義書に見られる様には一つに統合されていること。

二、世間行中観派と呼ばれる学派には智蔵と月称が配属され、夫々『二諦分別論』*Satyadvayavibhāṅgakarīka* 第二一偈『入中論』*Madhyamakavatara* 第六章第三五

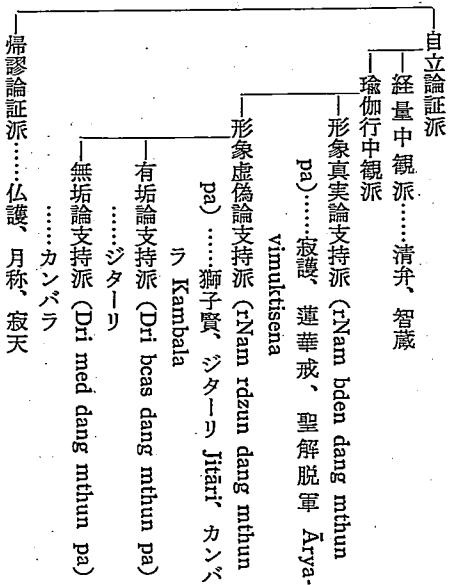
偈が典拠として引用されている。この世間行中観派といふ学派は例えば『ブトゥン仏教史』*Bu ston Chos 'byung* に於いては帰謬論証派の同義異語として示されているが、ウパロサルウパロサルの宗義書に於ては両派は厳密に区別されている。次に掲げる第三の点もこの厳密な区別を明確に示している。

三、智蔵は一方では世間行中観派に配されもう一方では自立論証派に配属されている。この事實は、第二の点として指摘したウパロサル宗義書に於ては世間行中観派は帰謬論証派と同一視されていないという点を明確に立証すると同時に、第一の点として示した二つの分類がウパロサル宗義書に於ては二つの次元の異った分類として示されており後代のゲルク派の宗義書に於ける様には一つに統合されてしまっていないという点を傍証している。

四、ゲルク派宗義文献と初期の宗義文献

それでは後代のゲルク派の宗義書の著者達ほどの様にこの二つの分類を統合してしまっているであろうか。後

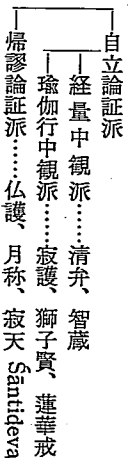
【表三：シヤムヤンシエン】



右表に明らかな如く、これらの後代のゲルク派の宗義書に於ては、経量中観派、瑜伽行中観派の二派は自立論証派の細分として統合されてしまっている。また、世間行中観派と帰謬論証派との同一視は、後代になる程世間行中観派という呼称に対する興味が稀薄となるせいか、例えばチヨキギヤルツェンの宗義書中に於いて何ら関連されていないが、彼のツォンカパ Tsong kha pa (二三

代のゲルク派の著者として主にセラ・ジエンパ・キギヤルツェン Se ra rje btsun pa Chos kyi rgyal mtshan (一四六九—一五四六)、ダライ二世ゲドゥンギヤツォ dGe 'dun rgya mtsho (一四七五—一五四二)、シヤムヤンシエン、チャンキヤ二世ロルペーブルジエ Cang skya II Rol pa'i rdo rje (一七一七—一七八六)、シヤムヤンシエン二世ロンチョクジクメワンポ dKon mehog 'jigs med dbang po (一七二八—一七九一)、トゥカカン三世ロプサンチヨキニマ等々を列挙することが出来るが、ここでは、この統合の形式を最も早く定着させたと思われるチヨキギヤルツェンのものと、同じ定式の最も発展した形を示していると思われるシヤムヤンシエンのものを代表として表の形で掲げておこう。

【表二：チヨキギヤルツェン】



五七一—四一九)の『入中論』注注対す注 *bsTan boos* *dBu ma la 'jug pai rnam bshad dGongs pa rab gsal gyi dka' gnad gsal bar byed pai spyi don legs bshad skal bzang ngul rgyan* (ナンチー・Ser byes)版五葉表四行)に於ては明言されぬ。

これらのゲルク派の宗義書に先立つ例えばタクパギヤルシエン Grags pa rgyal mtshan (一一四七—一二二六)、サキヤン・ンガイタ・タンガ・キヤルツェン Sa skya Pandita Kun dga' rgyal mthun (一一二二—一二五二)、ブアマン・リンチエン・アマン Bu ston Rin chen grub (一一九〇—一二六四)、ムラワ・ギヤルツェン・ペルサン 'Ba' ra ba rgyal mtshan dpal bzang (一一三〇—一二九一)、ポトン・ンチエン・チョクレーナムゲル Bo dong Pan chen Phyogs las nram rgyal (一一三六—一二四五) 等々の諸論師は種々様な中観派の分類を呈示しており、彼らが如何に苦勞して中観思想の系譜を理解しようとしていたかをよく窺うことが出来る。ここでは紙数の関係上、彼らの夫々の分類に立入ることは出来ないが、少くともこれらの初期の思想家たちは経量中観派と

瑜伽行中観派を自立論証派の細分とは考えておらず、後代のゲルク派の諸論師たちと考えを異にしている点是指摘しておかねばならない。但し、ここに列挙した内、サキャバンディタのものは『教義的立場の善説』*gzhang lugs legs par bsblad pa*を指すが、この書はどうもサパンの真作として認め難い疑いも強く、かなり後代の別人の著作である可能性があるため、今後再吟味してみる必要がある。

五、経量中観派・瑜伽行中観派の分類と自立論証派・帰謬論証派の分類

中観学派の細分派の諸名称のうち、経量中観派、瑜伽行中観派という名称を最初に用いるのは九世紀初めの大校閲翻訳官 (*Zhu chen gyi lo tsa ba*) イェシェーデ *Ye shes sde* である。彼はその著『見解の差別』*lta ba'i khyad par* に於て清弁を経量中観派に、寂護を瑜伽行中観派に配属せしめている。尤も、松本史朗氏の指摘されるように、『見解の差別』自体の中に於ては、これらの総合学派の名称の前半部は夫々経量部、瑜伽行派という

意味ではなくて、『般若経』、『瑜伽師地論』という意味であった可能性が強い。しかし、『見解の差別』のこの部分が以後ほとんど例外なく総合学派の呼称の典拠として解釈されている事実を見れば、後代の作者の誤解であったにせよ、用語自体を最初に用いたのは、イェシェーデであると依然考えておいて差支えないのではないかと思われる。

『見解の差別』はチベット大蔵経に含まれるもの以外に敦煌チベット文書中にも存在することが知られている。これまで指摘されているのはペリオ本八一四、八一五、スタイン本六九二、六九四であるが、ペリオ本八二〇、二一〇一も同文献の一部を構成していることを付け加えておく必要がある。

『見解の差別』とほぼ同時代に属する文献で、経量中観派、瑜伽行中観派という総合学派の呼称の一方或は両方に關説するものには、ヘルツェク *dPal brtsegs* の『見解の次第』*lta ba'i rim pa'i nyi ma 'od* の『見解の次第』*lta ba'i rim pa'* には作者不詳の敦煌チベット文書群 (スタイン本六九三、ペリオ本一一六一

二一、八一七、八一九、八三七、八四二) が存在する。

以上の論書の著者たちはいづれもチベット人達であるが、一方、経量中観派、瑜伽行中観派という総合学派の呼称は、チベット人による創作という前言に反して、一インド論書——即ち、ラクシュミ——*Laksmi* の『五次第注』*Pancakarmanatika Kramanvachapakatika*——にも見られることがこれまでの研究により明らかになっている。しかしながらこのラクシュミというカシミールの尼僧は一一世紀初めに活躍した人物であり、イェシェーデたちに遅れること二世紀、従って、総合学派の名称の創作について、イェシェーデたちの優先性を凌ぐものではない。またラクシュミは経量部を無形象知識論者と考えていてかなりの誤解がある様であり、再吟味を要する。

経量中観派、瑜伽行中観派という用語の創始者がイェシェーデたちであるとすれば、では、自立論証派、帰謬論証派という用語の創始者は誰であろうか。これらの用語は仏教前期伝播期 (*Pre-Pre*) には未だ存在しないことを先づ指摘しておく必要がある。八一四年に作成された

『翻訳名義大集』*Mahavyutpatti, Bye brag tu rtog par byed pa chen po* 中にも収録されてはならず、その他の前期伝播期の諸論書中に確認されたこともない。要するに、経量中観派、瑜伽行中観派という分類が先立って存在するのである。ここにも両分類の統合が後代の産物であることの一つの証左が窺えるであろう。

自立論証派、帰謬論証派の用語を最初に用いたのは、現在知られている限りでは、仏教後期伝播期 (*Phyi dar*) に月称の論書を大量に翻訳したパツァプニマタク *Pa tshab Nyi ma grags* (一〇五五—?) である。彼の著作は残念ながら現在伝わらないが『大宗義書』中の引用より知ることが出来る。従って上に言ったように、これらの用語もチベット人によって造られたものであるが、このことはチベット人たちが自身も知っている。例えば、ツォンカパやシャーカーヤチョクテン *Shakya mchog Idan* (一四二八—一五〇七) はこの事実を明言している。

六、両分類の統合

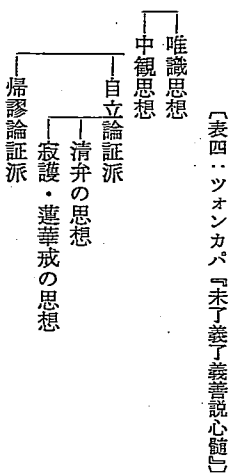
それでは、これらの元来は概念のレベルの異なる二つ

の分類を一つに統合するのは誰であろうか。つまり、経量中観派と瑜伽行中観派を自立論証派の細分として考えるのは誰が最初であろうか。上に述べたように、この形の定式を最初に明確な形で示すのはセラージェツンパ、チョキギヤルツェンであるが、その傾向の萌芽は既にツォンカパに認めることが出来る。

彼の四六歳の時(一四〇二年)の作『道次第広論』*Lam rim chen mo* に於てツォンカパは数人の先学による学派の分類を紹介している。勿論彼は経量中観派、瑜伽行中観派、自立論証派、帰謬論証派といった用語を用いている。しかし、上述した様なこれらの二つの分類を統合しようとする動きはこの書には全く見られない。むしろ彼は中観学派の分類に対して批判的な態度をとっている。

彼の五〇歳の時(一四〇六年)の作『未了義了義善説心髓』*Drang nges legs bshad snying po* に於ても二つの分類を統合する動きは未だあらわれていない。この書はツォンカパの著作中最も宗義文献の傾向が強いと言つてよい。同書は大きく分けて『解深密経』*Samdhivimmo-*

canashtra を根拠に唯識思想を叙述する前半部分と、『無尽慈経』*Alaṅkāraṅmūrtideśa* を根拠に中観思想を叙述する後半部分の二部分から成る。後半部分はさらに自立論証派と帰謬論証派の二部分に分かれたれ、自立論証派の部分が清弁の思想的立場を説く部分と寂護・蓮華戒の思想的立場を説く部分との二部分に分かたれている。表の形で示すならば次の如くである。



ツォンカパがもしも中観学派の二つの分類の統合を明確に意識していたならば、彼が経量中観派、瑜伽行中観派という用語を用いるべきは、まさにこの論書に於てであったらうと思われる。しかしながら、これらの用語はこの論書中にはただの一度も用いられてはいないのであ

る。この事實は、中観学派の二つの分類の統合がこの段階では未だ体系的には確立されていないことを示している。しかし、ともあれ、右表に明らかな如くツォンカパが同書中に示したシェーマは、経量中観派、瑜伽行中観派という用語の不在を別にすれば、まさに後代のゲルク派の諸論師たちの用いるものとほぼ同じものである。

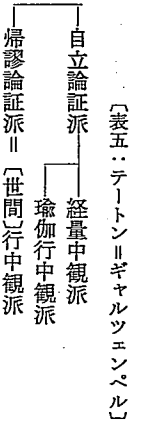
彼が死の前年、即ち一四一八年に著した『入中論注』*lBu ma dgongs pa rab gsal* に於ては、瑜伽行中観派という呼称と、「外境を認める自立論証派」(Phyi don khas len pa'i rang rgyud pa)という表現を列記している。従つてこの作品中に於てツォンカパは中観派の二種類の統合へとより近づいていると言つてよいであろう。但し、完全に体系化されているとは言ひ難い。

同様の考察はツォンカパの二大弟子、即ち、ギヤルツァンジエGyal tshab rje (一三六四—一四三二)、ケートゥンジエmkhas grub rje (一三八五—一四三三)の諸著作中に続ける必要のあることを今後の課題として指摘しておきたい。チョキギヤルツェンに先立って明確な形のシェーマをそこに見出すことが出来るかも知れない。

以上、調査が完全に尽くされているとは言ひ難いので断定することは出来ないが、現時点で少くとも次の二点は確認出来るのではないかと思われる。(一)中観派の二種類を統合する傾向の萌芽は微かではあるがツォンカパに認められること。(二)この傾向は彼以前には見出せないこと。

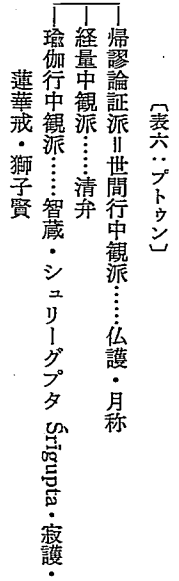
七、今後の問題

しかし、問題はまだ残されている。ここで我々はボン教の一文獻を取り上げねばならない。テートンギヤルツェンパル Tre ston rGyal mtshan dpal の『ボン門明示』*Bon sgo gsal byed* はボン教の教義体系を明らかにした一種の宗義文献であるが、同時に仏教や外教の教義をも叙述して、ボン教の作者の目から見た仏教や外教の体系を知り得る点で興味深い。その中で中観派の分派について述べられた箇所を表の形で示すならば次の如くである。



表に明らかな如く、ここには少くとも次の二点が確認出来る。(一)経量中観派、瑜伽行中観派は自立論証派の細分と考えられている。(二)世間行中観派は帰謬論証派と同視されている。

テートンニギヤルツェンペルはボン教の著者であるから、彼がこれらの記述を彼に先立つ仏教の論師から借用したと考えるのが妥当であろう。第二の点については問題はない。上述した如くプトゥンを彼の先行者として考えることが出来るからである。今一度プトゥンの分類を表にしておけば次の如くである。

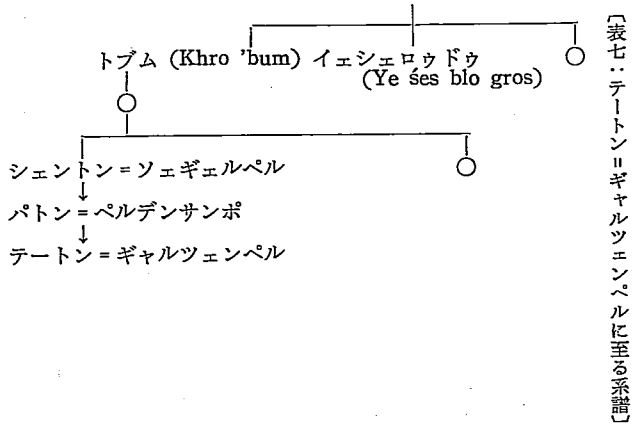


しかしながら第一の点はかなりの問題を提示する。テートンニギヤルツェンペルがチヨキギヤルツェン以後の人物であれば、或は少くともツォンカパ以後の人物であれば何も問題はなかったであろう。しかし彼はどうもツォンカパに微かに先行する人物のようである。

彼の生存年代の詳細を決定するための資料は残念ながら現在のところ知られていないが、だいたい活躍時期は次の様にして算定することが出来る。

『ソクチュエン・シヤンツェン祖師伝』 *rDzogs pa chen po zhang zhung snyan rgyud kyi bryud pai bla ma'i man thar* ノルテンルチト dPal ldan tshul khrims (二十世紀) の『ボン教史』 *gYang drung bon gyi bstan 'byung* にあればテートンニギヤルツェンニハシヒンツェンニハシヒル gShen ston Sod rgyal dpal の下で出家したソクチュエンニハシヒル sPa ston dPal ldan bzang po の弟子である。シヤルザニタシギヤルツェンニハシヒル Shar rdza bkra shis rgyal mtshan の『善説蔵』 *Legs bshad mdo* による家系図と合せればおおよそ次のような図となる。単線は家系、矢印は師資の関係

を示す。



イエシエロウドウはツァン gTsang のタルディン Dar Iding に僧院を建立する。その年代はボン教の諸年表 (asTan ris) によりまざまざであるが、一一七三年が

ら一二五七年の間の出来事であることが解る。従ってイエシエロウドウの活躍年代は一二世紀後半か一三世紀中頃と考えることが出来る。上表の父子の間に三〇年、師弟の間に二〇年の隔たりを推定することが出来る。すれば、テートンニギヤルツェンペルの活躍年代は一三世紀後半又は一四世紀中頃に落着くことになる。いづれにしても、彼がツォンカパ以後の人物である可能性は無いと言つてよいであろう。

仏教側の著者の誰一人として中観派の二つの分類の統合を明確な形で示さない時代に、ボン教の一著者がそれを行つてゐるのは極めて印象的である。彼に影響を与えたのは誰であったか、今後の課題として調査を続行しなければならぬであろう。

尤も推測を加えることは容易である。プトゥンが世間行中観派を帰謬論証派と同一視したことによって自動的に他の二派は自立論証派と考えられ、テートンニギヤルツェンペルがそれを借用したのである。しかしながらプトゥンはそれを明言しているわけではないし、我々が吟味し得た限りの資料は、チベット蔵外文献全体から

見ればごく僅かな量にすぎないのであるから、安易な推測によって問題を收拾してしまうよりは、もっと明白な形で解決されるべき問題として今後に残しておく方が適当であると考えられる。

八、おわりに

以上、ウパロサルの宗義書中に見られる特異な分類を契機に、チベット諸宗義文献中に於ける中観派の分類の変遷と概念の発展をある程度明らかに出来たかと思ひ。チベット学の他の諸分野と同様、宗義文献の分野の研究もまだ始まったばかりと言つても過言ではない。今後諸研究者が協力分担して本稿第二節に列挙した宗義文献夫々の批判的校訂本と訳注を作成する必要がある。当面筆名は、仏教後期伝播期に出現する最初の宗義文献と考えられるロンントニョキサン邦 Rong zom Chos kyi bzang po (二一世初) の二つの宗義書——『見解の備忘録』*Grub mtha'i brjed byang*——と、ウパロサルに少し類似した思想を示すムラワニギヤルツェンパルサン 'Ba' ra ba

Gyal mtshan dpal bzang (一三〇—九二) の宗義書についてその準備を進めている。また、本稿中に闡説したボク教の『ボク門明示』全体も機会があれば明らかにしたいと考えている。

〔付記〕 紙数の関係上、注は全て割愛した。筆者は先立つ、

K. Mimaki, *Blo gsal grub mtha'*, chapitres IX (Vai-bhasika) et XI (Yogācāra) édités, et chapitre XII (Mādhyamika) édité et traduit, Zinbun Kagaku Kenkyū-sho, Université de Kyoto, 1982.

を刊行しており、本稿はいろいろその序論の一部のレジュメであるので、詳細については拙著を参照されたい。

(みまき かつみ・京都大学助教授)